

私たちはその事実をしつかりと見詰め、みずから体験してきたのだ。今我が身の健康であることの幸せを思い、決してあの時代のことを忘れてはならない。

それは再び戦争の愚を繰り返さないためにも。

故郷の土を踏むまでは

岩手県 佐々木 清 一

第一話 蚤との格闘

戦争というものは何が生死を分けるかわからないものである。ソ満国境五又樞から撫順に配属、それから奉天に移動、原隊に復帰する途中で終戦、武装解除される羽目になった。

五又樞では真先にソ連軍の侵攻を受け全滅に近い戦死者だったといわれ、我々もそこにいれば命は無かったものと思われる。ダモイ東京の甘言で乗せられた貨車は馬糞が山となっており、掃除しようとしたらソ連兵は出してはならんと言う。仕方なしにそれをならし

て天幕を敷いて寝ることとした。少し臭いけどもフカフカして寝心地は悪くはない。

しかし、そのうちに大変なことが起こった。蚤の大発生である。馬糞の中に卵を産むのかどうか知らないが取っても取ってもふえ続けてどうにもならない。あるとき、暇に任せて一匹、二匹と数えて殺したら合計二百匹取ったことがある。もちろん私一人分だけであり、皆一生懸命取ったのだからその数は驚くべき数字であろう。

奉天から黒河に送られ、まず貨車からおろされて船積みの仕事など使役に駆り立てられる。その最初の夜のことである。ソ連兵は我々にこの建物の中に入って休めと言う。見ればごく小さな建物で到底入りきれぬ人数でないのに、入口に六尺豊かな屈強なソ連兵が五く六人もいて日本兵を引っ張り出しては体当たりで無理やり詰め込んで、最後は戸口に鍵をかけていった。手をおろしているとその分詰め込めないということ。全部手を上げたまま詰め込まれたのだから、手をおろしたくてもおろすわけにはいかない。時間が経つにつ

れて人いきれでもうもうと湯気が立ちのぼり汗がしたり落ちる。蚤が思いのままに人の体をかじりまわることが、上げた手をおろすどころか身動きすらできないのだ。そうこうしているうちに股のあたりに生暖かいものが流れてきた。

何とも我慢しかねて立ったまま小便をするから密着している相手はもろにその被害を受ける。自分もその前の人間に被害を与えるのだから何ともならない。排泄、蚤の横暴、体温の上昇による発汗、喉の渇き、手を上げたままの姿勢、いずれも数分位なら我慢もできようが、一晩中となれば発狂する者まであらわれた。その長かったこと、苦しかったこと、こういうことに遭った者でなければ到底理解できないだろう。朝、解放されたときの喜びと、次に何をされるかわからない不安。あのあざ笑うようなソ連兵の態度。戦いに敗れた者の惨めさを嫌というほど味わった長い苦難の途の第一歩だった。

第二話 銃口の恐怖

これで仲間を喜ばしてやれると思いき小走りに作業所

に向かおうとしたとき「ストロイ(とまれ)」の叫びとともにダダッと銃声がした。二、三発の弾丸がビュウと空気を切り裂き耳元をかすめていった。明らかに私を狙った銃弾である。

私は一瞬足がすくむ思いで声のする方を振り向くと、私と同年代のがっしりした体格のソ連兵が自動小銃を脇に抱え銃弾が当たらなかったのが残念そうな顔つきで向かってくるではないか。思えば昭和二十年八月原隊復帰の途中、奉天で終戦を迎え、黒河を経てシベリア送りとなった。四十五日もの長旅の末、ギスカスカン収容所におけるレンガ工場の土掘り、次に送られたバルハン収容所の住宅建設の基礎工事等、零下四十度にも達する極寒地の強制労働で体重を二十キロ以上も減らし大腿は腕の細さになってしまふほどの重労働に耐えて、ようやくナホトカの収容所に移されてからの出来事である。

ここで死んでは元も子もない。今までの苦勞が水の泡になる。食糧の足りないことはナホトカとて同じことで、朝昼食用として豆腐半分くらいのパンと若干モ

ツの入ったスープだけである。空腹のため朝のうちに全部食べて昼は水を飲むだけ、夕食まで何も食べられなかった。そんな状態なのでパン工場の増築作業の時などは、そこで飼っているアヒルに与えるクズパンをアヒルと競争して奪い合うという涙ぐましい場面もあった。

次の現場の近くに干し魚を加工しているところがあり、腐り気味の魚なら分けてもらえろということ聞き出してきた者がおり、当番を決めてもらってくることにした。もちろん巡回の監視の目を盗んでである。昼は監視の兵士も休んでおり見つかる可能性は少ないとのこと、昼休みにもらってくるようになった。その日は私の番になり頼み込んで魚をもらい外套の中に入れ、作業所に戻ろうとしたときのことである。無断で作業所を離れ外套の中には食糧を隠してある。これがわかると盗んだと思われぬ。捕虜の身としては、銃殺に値する行動だったのである。

心臓は高鳴り足はガクガク、もう二度と父母の顔は見られないと思った瞬間、「ヤボスキ、ソルダート、

ストタコイ(日本兵、そこで何をしてるのか)とソ連兵は叫んだ。何か言わなければ撃たれる。でもなかなか声にならないのである。そのとき、偶然にも魚を押さえていた手に外套のポケットにコテが入っているのが感じられた。「フチュラ……」(きのうまで近くの家に仕事にきていて道具を忘れたので取りに行ってきた)と身振り手振りで言いコテを出して見せた。しばらく私を見ていたが(私にはすぐ長く感じた)急に自動小銃の先がビクッと動いた。「あつ、これで終わりだ」と感じた。しかし二回目の動きはしゃくり上げるような動きであった。そして、ソ連兵の口からは「イージダムイ(行け)」の音が発せられた。今思えばあのとき、片言ながらもロシア語が話せなければ自動小銃の引き金は引かれていたと思う。作業所に戻ってから皆が笑顔で食べる干し魚も、その日ばかりは胸の鼓動がおさまらず口に入れても味が全然感じられなかったのは言うまでもない。

とっさに言いわけしたものの、あの兵隊に外套の中に入れたあの魚の膨らみがわからなかったはずがない。

敵国の人間でも、あの食糧であのような重労働をしてと哀れんで逃がしてくれたものと思う。生きて故郷の土を踏むまではと耐えに耐えて昭和二十三年五月十五日、舞鶴に上陸したときの感激は今も忘れられない。

紙のないシベリア抑留の苦難

千葉原 斎藤 明

一、ラーダー収容所（モスクワ東南約二百キロ・

北緯約五十三度）

昭和二十年十一月六日、牡丹江の仮収容所を出発、同年十二月一日、タンポフ市の近くにあるラーダーと云う小さな町の収容所に着いた。約一か月間の有蓋貨車輸送である。

(1) 収容所

収容所は松林の中で兵舎のように見えた。建物の周囲は有刺鉄線で囲まれ、所々に望楼があり、ソ連兵が監視している。建物は半地下になっており、入口から

階段で中に降りて行く。地上に露出しているのは一メートル程の高さの屋根の部分だけである。屋根は板葺きで室内はうす暗い。ところどころ天井に明かり窓があるが、燈火がなくては思い切って歩けない。中央が通路になっていて、両側を上下二段に板で仕切っている。

北欧の十二月は特に夜が長い。太陽は午前十一時頃出て、午後三時頃見えなくなる。その前後二時間位は白夜と云って明るい時間があるだけだ。こんな建物に二百人ずつ五棟に分宿させられた。

この収容所隣にはドイツ軍将校が有刺鉄線の柵を隔てて収容された。ドイツ語の出来る人は朝夕柵越しに話をする事が出来た。

(2) 日課

一日の日課は朝八時頃（まだ薄暗い）の点呼から始まる。屋外の雪の中に整列して「お早うございます（ソ連語で）」の挨拶と人員の点検で終わる。洗面は雪で顔をこする程度。食事は黒パンで一日分三百七十グラム。それに少々の砂糖と紅茶（葉だけ）。外に毎食毎